

機動部隊旗艦「大和」 4

「武蔵」出陣

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明

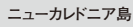
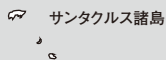
地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたっふ

目次

第一章	山本五十六の選択	9
第二章	欧州の「下腹」	33
第三章	ソロモンの横撃	59
第四章	六空母集結	95
第五章	珊瑚海の「武蔵」	151
第六章	嵐の予兆	205

ソロモン諸島

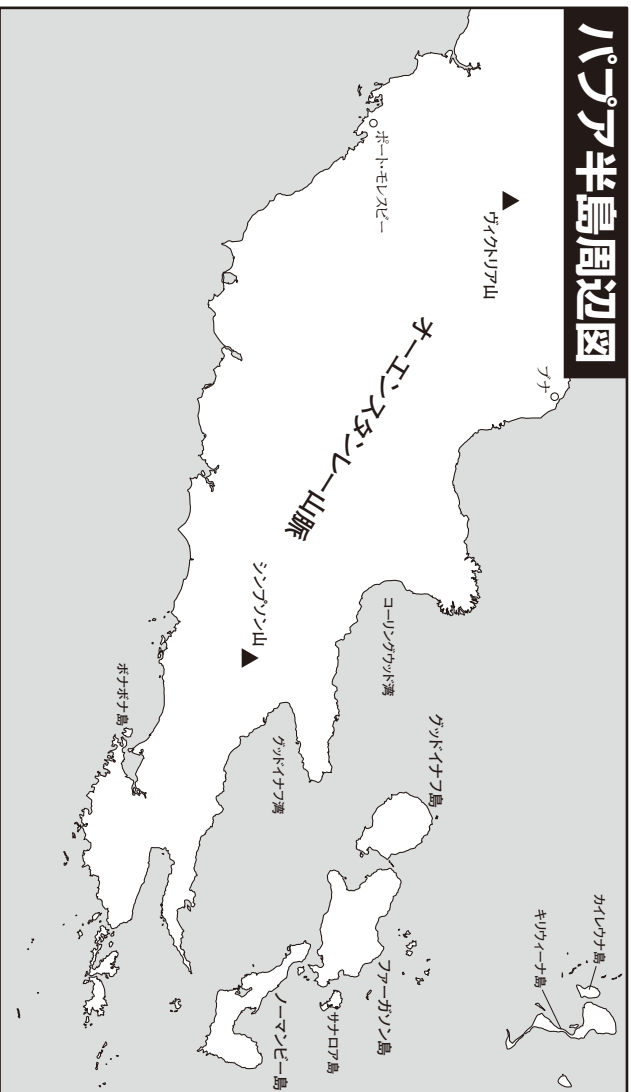


ニューヘブリデス諸島

ソロモン諸島周辺図



パピア半島周辺図





機動部隊旗艦「大和」 4

「武蔵」出陣

第一章

山本五十六の選択

1

闇に閉ざされた海岸に、青白い光が点滅した。

昭和一八年三月一七日二二時二七分（現地時間二
三時二七分）。

ガダルカナル島のルンガ泊地だ。

「信号を確認。『カモメ、カモメ』」

「手順通り返信せよ」

信号長安田保上等兵曹の報告を受け、軽巡洋艦
「北上」艦長鶴岡信道大佐が命じた。

「『シラサギ、シラサギ』と返信します」

安田が応え、艦橋の後ろに位置する信号灯が点
滅した。

しばしの沈黙の後、

「信号了解。深謝ス」

との応答が、海岸から返された。

「敵発見の報告なし」

航海長佐藤文雄少佐が報告した。

「両舷停止。錨下ろせ」

を鶴岡が命じ、「北上」はその場で停止した。艦

首と艦尾から、投錨の水音が届いた。

後続する第二七、第三〇駆逐隊の駆逐艦七隻も、
順次錨を下ろす。

「作業開始！」

鶴岡が、低いがよく通る声で下令するや、艦の後
部から水音が伝わった。

食糧、弾薬等の補給物資を詰めたドラム缶が、海
面に投げ下ろされ始めたのだ。

昨年——昭和一七年一二月後半から始まった、軽
巡、駆逐艦による物資輸送だ。

火砲、軍用車両、飛行場建設用の土木機材といっ
たかさばるものは運べないが、食糧、弾薬、医薬品
等の物資を補給することで、守備隊将兵の生命を繋
ぎ、戦闘力を維持することはできる。

本来は輸送船を用いるべき任務だが、ガダルカナ

ルの周辺には多数の敵潜水艦^{せんすいかん}が網を張っていることに加え、ニューヘブリデス諸島のエスピリッツサント島から飛来するボーイングB17、フライング・フォートレスも、輸送船を攻撃して来る。

敵艦隊——巡洋艦や駆逐艦がルンガ沖に出現し、輸送船を狙^{ねら}うこともある。

多数の輸送船が失われた結果、大本営^{だいはんえい}は、「輸送船によるガダルカナルへの補給は極めて困難^{くわん}」

と判断、軽巡と駆逐艦を輸送船代わりに使用するよう、連合艦隊に求めたのだ。

このとき注目されたのが、第九戦隊の球磨型軽巡洋艦「北上」^{おおい}「大井」^{おおい}だ。

両艦は開戦前、艦隊決戦用の秘密兵器である重雷装艦^{しゅうそうかん}に改装されている。

竣工時に装備していた五三・三センチ連装魚雷発射管四基と、艦後部の一四センチ単装主砲三基を撤去し、六一センチ四連装魚雷発射管一〇基を装備

した艦だ。

片舷二〇射線、両舷四〇射線の雷撃力は、艦隊決戦で威力を発揮すると期待されたが、現実に起きた水上砲戦は局地的な戦闘に留^{とど}まった。

このため海軍中央は、両艦を高速輸送艦に再改装すると決定し、後部の魚雷発射管四基を撤去して、空いた場所を物資の搭載場所^あに充てたのだ。

「北上」は、一月半^{なか}ばから現在まで六回、ガダルカナルに物資を輸送した。

その間、失敗は一度もない。

他の輸送部隊には、潜水艦の襲撃やB17の空襲によって、物資もろとも撃沈されたり、被弾・損傷したりする艦もあったが、「北上」が参加した部隊は輸送任務を成功させるだけでなく、全艦が生還している。

輸送任務に従事する駆逐艦の乗員には、

「『北上』は、輸送部隊の守り神だ」

「ガダルカナルには『北上』と共にいきたい」

などと公言する者が少なくない。

「今まで上手くいったのは、本艦乗員が最初から最後まで、緊張感を持って任務に当たったおかげだ。

警戒心の持続が、本艦と輸送部隊に幸運を呼び寄せたのだ。それを忘れるようなことがあれば、本艦からも僚艦からも、幸運が逃げてゆく」

「北上」乗員に、鶴岡はどのように訓示し、警戒を怠らぬよう厳命していたが――。

艦の後部では、荷下ろしの作業が続いている。

月齢一一のおぼろげな月明かりが、波間に浮かぶドラム缶をぼんやりと照らしている。

ガダルカナルの海岸から駆け付けて来た小型発動機艇や内火艇が、ロープをひっかけ、ドラム缶を陸地へと引いてゆく。

小発は、ガダルカナルの攻略に当たった陸軍川口支隊が上陸作戦時に使用したもの、内火艇は海軍設営隊に配備されたものだ。

舟艇の多くは、空襲によって破壊されたが、ガ

ダルカナルの守備隊は偽装によって艇を秘匿し、小発と内火艇一〇隻を運用していた。

「艦橋より通信、敵信傍受の有無報告」

「現在までに傍受された敵信なし」

鶴岡の問いに、通信長仁科三郎中尉が答えた。

「北上」は重雷装艦への改装を受けたとき、砲煩兵装が、一四センチ単装砲四門、二五ミリ三連装機銃二基に減らされている。

砲戦になれば、駆逐艦を相手取っても勝てるかどうかといったところだ。

任務を完了し、かつ生き延びるためには、敵をいち早く発見することが不可欠だ。

水雷長の飛田清少佐は、

「本艦には、両舷二四射線の発射管が残っています。いざとなったら、魚雷にものを言わせませすよ」

と、自信ありげに言っていたが――。

荷下ろし作業は、順調に運んでいる。

軽巡、駆逐艦による物資輸送を、自嘲的に「ネ

ズミ輸送」などと呼ぶ駆逐艦の乗員もいるが、今は誰もが無々（もも）と作業に当たっている。

二三時一八分（現地時間三月一八日一時一八分）「作業終了！」

の報告が上げられた。

二七駆の司令駆逐艦「有明」（ありあけ）と三〇駆の司令駆逐艦「弥生」（やよい）からも、「作業完了」の信号が送られる。

「錨（いかり）上げ」

鶴岡が下令したときだった。

「左前方より爆音！」

との報告が、見張員より上げられた。

「見張り、機種及び機数報せ」

「機種名は不明なれど単発機の模様。機数一」

見張員の声に、鎖（くさり）が擦れ合う不協和音が重なる。

錨（いかり）が上げられたのだ。

「敵の観測機だな」

鶴岡は敵の正体を見抜いた。

単発機が一機だけとなれば、敵の戦艦（せんかん）か巡洋艦（じゆうかん）か

ら放たれた水上機である可能性が高い。

敵艦が、近くまで迫っているのだ。

「全艦に命令。『現海面より離脱ス。我ニ続ケ』」

鶴岡は、安田信号長に命じた。

補給物資の投下を終え、身軽になつてはいるが、敵艦隊と一戦交えるつもりはない。

今は、艦の保全が第一だ。

「両舷前進全速！」

「針路三一五度！」

鶴岡は、機関長山田定智（やまださだとも）中佐と佐藤航海長に命じた。

た。

機関の鼓動（こどう）が高まり、「北上」は前進を開始する。

「面舵（おもかじ）一杯。針路三一五度！」

佐藤が操舵室（そうた）に下令し、「北上」が艦首（りようせん）を右に振る。

左舷側（ひだり）に見えていたガダルカナル島の稜線（りようせん）が死角に消える。

「敵機、後ろ上方！」

艦橋見張員が叫んだ直後、爆音が頭上を通過した。

数秒後、前上方に光源が出現し、青白い光が降り注ぎ始めた。

(来る！)

鶴岡が直感したとき、右後方に発射炎が閃いた。

一箇所だけではない。時間差を置いて、右から左へ、あるいは左から右へ、不規則に閃光が走る。

「後部見張りより艦橋。敵は巡洋艦三、駆逐艦一〇以上！」

「逃げるが勝ちだ」

見張員の報告を受け、鶴岡は呟いた。

後方から敵弾の飛翔音が迫り、「北上」の右舷側、あるいは左舷側に弾着の飛沫が上がる。

後方からも、砲声が伝わる。

二七駆、三〇駆の各艦が、後部の主砲で応戦を開始したようだ。

「砲術より艦長。二、三番主砲、撃ち方始めます」

砲術長安平輔少佐が報告し、一拍置いて砲声が轟く。

右後方に指向可能な二、三番主砲が、砲撃を開始したのだ。

敵弾は、なおも落下する。

飛翔音が後方から追いつがり、「北上」の前後に、左右に、弾着の飛沫が上がる。

右舷至近、あるいは左舷至近にも敵弾が落下し、鶴岡をひやりとさせる。

六基の六一センチ四連装魚雷発射管には、強力無比の九三式六一センチ魚雷が装填されているのだ。

ここに直撃を受ければ、魚雷が誘爆を起こし、「北上」は轟沈してしまう。

幸い、直撃弾はない。「北上」は七隻の駆逐艦を従え、闇の中を疾駆する。

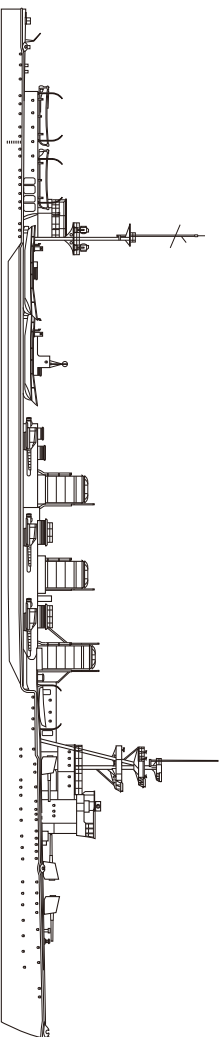
右前方に、小さな島影が見え始める。

ガダルカナル島の北西に位置するサボ島だ。

「北上」は速力を落とすことなく、サボ島の南側を通過する。

それを境に、砲撃は間遠になり始めた。

日本海軍 球磨型輕巡洋艦「北上」



全長	162.2m
最大幅	14.2m
基準排水量	6,887トン
主機	ギヤーードタービン 4基/4軸
出力	77,989馬力
速力	32.0ノット
兵装	14cm 50口径 単装砲 4門 25mm 3連装機銃 2基 61cm 4連装魚雷発射管 6基 大型発動機艇 4隻
搭載乗員数	486名
同型艦	大井

基準排水量3,500トンの天龍型輕巡洋艦の航役により、輕巡洋艦を水雷戦隊旗艦として運用するノウハハを得た日本海軍は、より高性能な駆逐艦との組み合わせを考え、天龍型の発展拡大版である基準排水量5,500トンの輕巡洋艦9隻の建造を決めた。この9隻のうち5隻が球磨型であり、本艦はその3番艦である。

大正10年4月に竣工した本艦は、日本海軍の新兵器である酸素魚雷の開発成功を機に、同型艦の「大井」とともに61センチ魚雷発射管40門を搭載する重雷装艦に換装された。しかし、今次大戦において艦隊決戦の局面は到来せず、結局、昭和17年9月に後部魚雷発射管4基を撤去し、ここに大型発動機艇4隻を搭載する高速輸送艦とする再改装工事を受けた。

現在、本艦は南方への物資輸送における重要な戦力として、日本海軍のみならず陸軍の將兵からも親しまれている。

弾着が散発的になり、やがて消える。

「後部見張り、後続艦の状況報告せ」

「全艦、我に続行中！」

「よし！」

報告を受け、鶴岡は大きく頷いた。

輸送部隊に被害はない。

「北上」と七隻の駆逐艦は、虎口から逃れたのだ。

「友軍は大丈夫でしょうか？」

佐藤が表情を曇らせた。

陸揚げされたばかりの補給物資は、多くが海岸に

残されている。それらが敵艦隊の砲撃を受ければ、

ひとつたまりもない。

「うむ……」

とのみ、鶴岡は答えた。

鶴岡自身も同じことを懸念していたが、自分たち

の力ではどうしようもない。軽巡一隻、駆逐艦七隻

では、物資をガダルカナルに運ぶだけで精一杯だ。

鶴岡は、声を励ました。

「物資を焼かれたら、また運ぶまでだ。本艦は、強運艦だからな」

同じ頃、「北上」の姉妹艦「大井」は、ポート・モレスビーの沖で空襲にさらされていた。

「北上」が、主としてガダルカナルへの物資輸送に従事しているのに対し、「大井」はモレスビーの守備隊に補給物資を送り届けている。

この日は「大井」の他、第一四戦隊の軽巡洋艦「由良」「天龍」、第二二、二四駆逐隊の七隻が、輸送任務に当たっていた。

物資輸送には成功したが、帰路、モレスビーから七〇海里ほど離れたところで、旗艦「由良」の艦上に信号灯の光が点滅したのだ。

「由良」より信号。『上空警戒。第一配備』！

「対空戦闘。配置に就け！」

信号長梅津浩太上等兵曹の報告を受けた艦長相馬

信四郎大佐は、高司令達器を通じて下令した。

「大井」の艦上は、騒然となった。

敵の水上艦艇や潜水艦、魚雷艇の襲撃は警戒していたが、夜間空襲までは想定していない。

モレスビーでも、ラバウルでも、B17による夜間空襲はあったが、洋上を行動中の艦船が敵機に襲われた例はない。

それでも、乗員の動きは速い。

「対空戦闘」を告げるラッパが吹き鳴らされ、機銃員が三番煙突の両脇に設けられている二五ミリ三連装機銃に取り付く。

前部に四基が装備されている一四センチ単装主砲のうち、右舷側に指向可能な一、二、三番主砲が旋回する。

「艦長より砲術。射撃の時機判断は任せる」

「射撃の時機判断は、射撃指揮所にて行います」

相馬の指示を受け、砲術長藤田虎治郎大尉が復唱を返す。

「艦長より水雷。魚雷を全て投棄せよ。連管員は投棄後、艦内に避退」

「投棄ですか!!」

水雷長上野保兵衛大尉が、驚いた声で聞き返した。艦中央部の発射管六基には、九三式六一センチ魚雷四本ずつが装填されている。一発でも敵艦に命中すれば、大損害を与えられる酸素魚雷だ。

それを二四本、空しく捨てるのか、と問いたげだ。「投棄だ。被弾時の誘爆を防ぐ」

「ですが、この先、敵艦隊に遭遇したら……」

「目の前の危機を切り抜けるのが先だ。責任は、艦長が取る」

「……分かりました。魚雷を全て投棄します」

気圧されたような口調で、上野は応えた。

無念極まりない、と言いたげだった。

艦橋の後方から、水音が届く。

改装前は、帝国海軍最強の雷撃力を誇った重雷装艦だ。改装後もなお、両舷二四射線の雷撃力を持つ

ていた。

「大井」にとつては命とも呼ぶべき両舷二四本の魚雷が、敵の水線下を扶^{えぐ}ることもなく、海中に姿を消してゆく。

一四戦隊の「由良」と「天龍」はどうか、と思い、前方に目を凝^こらしたが、僚艦の動きははっきりとは分からなかった。

「大井」が対空戦闘の準備を整えたときには、爆音が聞こえ始めている。

「B17ではなさそうだな」

誰にともなしに、相馬は言った。

「由良」から信号が送られたとき、モレスビーに向かうB17ではないか、と考えたのだ。

だが、爆音は低空から伝わって来る。

敵の目標は、輸送部隊である可能性が高い。

「対空射撃よりも、操艦で回避する。操艦は、航海長に任せる」

相馬は、航海長原口栄^{はらぐちさかえ}少佐に方針を伝えた。

「大井」の対空兵装は貧弱^{ひんじやく}な上に、今は夜間だ。

一四センチ単装主砲も、二五ミリ三連装機銃も、命中はほとんど期待できない。

回避運動を行った方が、生き延びられる機会が増える。

原口は一昨年一〇月より、約一年半に亘^{わた}って「大井」の航海長を務めている。

艦の癖^{くせ}については、熟知^{じゆくち}しているはずだ。

「敵弾は、全てかわして御覧^{ごらん}に入れます」

原口は、落ち着いた声で返答した。

敵機の爆音は、更に拡大している。右正横^{せいおう}から、急速に近づいて来る。

「由良」「天龍」の艦上に、発射炎が閃いた。

僅^{わず}かに遅れて、「大井」の一四センチ単装主砲も火を噴いた。

「二三駆、二四駆、撃ち方始めました！」

後部見張員が、僚艦の動きを報告する。

右舷上空の闇の中に、次々と爆発光が閃く。

光の中、瞬間的に敵の機影が浮かび上がる。

「敵二機、右正横！」

「面舵一杯。針路二一〇度！」

見張員の報告を受けるや、原口が操舵室に下令した。

「大井」はすぐには艦首を振らず、直進を続けている。

艦橋の後方から連射音が届き、真っ赤な火箭が翔上がり始めた。

右舷側の一番機銃が火を噴いたのだ。

僅かに遅れて、爆音が続けざまに「大井」の頭上を通過する。

左舷側からも、二五ミリ弾の火箭が翔上がるが、それが敵機を捉えることはない。敵機は輸送部隊の左方へと離脱している。

弾着が来るか、と思ったが、直撃弾も至近弾もなかった。

代わりに、部隊の左舷上空に多数の光源が出現し、

月明かりを思わせるおぼろげな光が降り注ぎ始めた。

「敵機、右正横。高度〇六（六〇〇メートル）！」

艦橋見張員が叫ぶ。

新たな爆音が、右方から聞こえて来る。

数は五、六機だ。吊光弾の光に照らされた軽巡や駆逐艦を狙って来る。

「大井」の舵が利き始め、艦首が大きく右に回った。

「大井」が直進に戻ってから数秒後、艦の左右両舷付近で、続けざまに爆発が起きた。

左右から押し寄せる爆風が、「大井」の艦体を右に、左にと揺さぶる。

飛び散った海水が驟雨となつて、「大井」の前甲板や一四センチ単装主砲の上から降り注ぐ。

艦底部を突き上げる爆圧はない。

敵は着発信管付きの瞬発弾を使用したのだろう、爆弾は全て海面で爆発している。

八発の至近弾を数えたとき、

「『由良』に至近弾！」

艦橋見張員が報告した。

相馬は、ちらと左舷側を見やった。

「天龍」「由良」も面舵を切り、敵機に艦首を向けている。

「敵六機、前上方！」

また、新たな報告が上げられた。

前甲板に発射炎が閃き、砲声が艦橋を包んだ。

前上方に指向可能な一、三、四番主砲が、砲門を開いたのだ。

命中を期待するが、敵機が火を噴く様子はない。

針路、速度とも変えることなく、六〇〇メートルの低高度から、「大井」目がけて突っ込んで来る。

「大井」の右舷側で、あるいは左舷側で、外れ弾が爆発し、爆風が艦を揺さぶる。

艦橋の左脇にも一発が落下し、盛大な飛沫が上がる。

直撃弾はない。

「大井」は紙一重のところで、敵弾をかわしている。

最後の機が後方に飛び去った。

「どうやら、これで——」

相馬が呟いたとき、艦の後部から炸裂音と衝撃が伝わった。

「大井」の艦体は激しく震え、金属的な叫喚を發した。

秘密兵器である重雷装艦に改装されたとはいえ、元は大正一〇年に竣工した旧式輕巡だ。艦齡は二一年に及び、艦体は老朽化が進んでいる。

その艦体が、悲鳴を上げているように感じられた。

「水雷より艦橋。五番連管被弾！」

「艦長より副長。消火急げ！」

上野水雷長から上げられた報告を受け、相馬は応急指揮官を務める副長勝原維顕中佐に下令した。

同時に相馬は、戦闘開始前の判断が正しかったことを悟った。

魚雷は惜しかったが、「大井」は誘爆、轟沈の運命を免れた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。